アンダーエスコート

遠州梟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アンダーエスコート

【Ｎコード】
Ｎ３４２５Ｔ

【作者名】
遠州梟

【あらすじ】
東ヨーロッパの国リデリア共和国とモルトバニア連邦共和国の戦争が停戦となった。が、モルトバニア内部で不穏な動きが見られた。事件はひっそりと進行し始めていた。
平和維持任務のためにリデリア国内に訪れていた日本陸軍神隆司二等陸曹は事件に巻き込まれてしまう。同じく事件に巻き込まれた少女ノーラとともに、隆司は味方の勢力圏へ逃れるため仲間を引き連れ脱出を開始する。

東ヨーロッパに戦雲を呼び込んだモルトバニア連邦共和国とリデリア共和国間の戦争が終わりを迎えつつあった。両国ともに疲弊し、戦争を続けることが困難になってきたのだ。国連の仲介もあり両国は停戦、終戦のための調整に入り始めていた。

だが、それを良しとしない者たちがいた。そして、モルトバニア連邦共和国国防軍内部で、静かに戦争再開を期す物達が動き始めていた……。

――東ヨーロッパ　リデリア東北部の小さな街――

早朝。この日も街はいつも通りであった。街を制圧しているモルトバキア軍の兵士達が朝の見回りをし、街の人々は兵士達と目を合わせないように若干俯いて足早に通りを歩いている。

街の中央通り。そこにはモルトバニア軍第2戦車連隊戦闘団の本部が置かれている小さなホテルがある。そのホテルの一室で、いつも通りではないことが起こっていた。

書類を入れたアタッシュケースを閉じ、一人の若い男が椅子から立ちあがった。

机の上に置いておいたを制帽被り、男――モルトバニア連邦共和国国防陸軍の士官アレクセイ・ベルドフ大尉ははやる気持ちを抑え、外見はいつも通りに落ち着いているように努めながら部屋を後にした。

ホテルの廊下をいつもの通りゆったりと、しかし遅すぎない速度で歩く。

彼は緊張していた。何故だろうか。その理由は彼が持つアタッシュケースの中にあった。ことの発端は全くの偶然からであった。彼は上官であるイグナート・アントノフ大佐の企てを知ってしまった

のだ。
その企てとは、戦争の再開であった。
国力を大きく疲弊させたあの戦争を再開させる。こんな馬鹿な話はないとベルドフは思った。そんなことすれば今度こそ我が祖国は破滅する。
ベルドフは即座に行動を起こした。アントノフの企てを立証する為の証拠を、彼は大佐が不在の間に大佐の私室に忍び込み入手した。そして自室に戻った後一通り目を通して重要な部分を抜粋し、この証拠を第2戦車連隊戦闘団の上級部隊である第3軍、その司令官であるゲオルギー・ロマネンコ大将に手渡すべく第3軍司令部へ向かおうとしていた。表向きは第3軍への出頭として。
廊下の向こうから小銃を肩に提げた兵士が二名やってきた。
気づかれたか？
緊張が最高潮に達する。だが、それはすぐに杞憂であると分かった。歩いてくる兵士二名は談笑している。別にベルドフを捕まえに来たわけではないようだ。ほっとし、息を小さく吐いくベルドフ。一方ベルドフの姿を認めた兵士らは慌てて談笑をやめ、挙手敬礼をしたのであった。ベルドフは返礼しつつ、二人の脇を通り過ぎた。
ベルドフは角を曲がり、兵士らから見えなくなったところで今度は大きく息を吐いた。
我ながら緊張のしすぎだと思う。アントノフは不在だ。ばれる要素はない。そう分かっていてもやはり緊張するものであった。
ベルドフは第2戦車連隊戦闘団司令部が置かれているホテルの地下駐車場へと向かう。地下駐車場には軍用の車両だけでなく一般の乗用車も多数駐車している。とはいうものの大半は使用されず、放っておかれている状態だ。
それもそのはず。占領下にあるこの街では、住民は仕事以外での乗用車の使用は禁止されている。故に、ほとんどが使われず埃にまみれているのであった。
戦争は停戦してこそいるものの、この第2戦車連隊戦闘団のよう

にリデリア国内に留まったままのモルトバニア軍部隊は多数ある。状況はあくまで“停戦”であり、いつまた戦闘が再開するかもしれない状態だからだ。
それにモルトバキア国防軍統合参謀本部も「全軍現在位置にて待機せよ」との命令を発していた。よって、リデリア国内のモルトバニア諸部隊はなにをするでもなく、待機命令に従いじっとしているのであった。
ベルドフは待機している車にまっすぐ向かう。モルトバニア軍で仕様されているジープタイプの小型トラック、ＵＡＺ‐３１５１２だ。駐車場に置かれているほかの一般乗用車とは違い、明らかに軍用のものなので分かりやすい。運転手が傍らに立っており、ベルドフが近付くと敬礼した。返礼しつつ、ベルドフは後部座席のドアを開け車内に身を潜り込ませた。車内でちらっと腕時計を見やる。第３軍司令部まで約二時間。現在時刻が午前十時なので昼頃には到着する予定だ。やれやれ、とベルドフは息を吐いた。
ここで、ふと妙なことに気づいた。運転手がなかなか乗り込まないのだ。
「おい、なにをしている」
運転手に声を掛ける。声を掛けた瞬間ベルドフはもしやと思った。
「動かないでください」
案の上であった。運転手がいつの間にか拳銃を手にし、こちらに向けていた。やられた。ベルドフは内心、己の迂闊さを呪う言葉を幾十は並べた。
「車から降りてください」
拳銃を突きつけられていてはどうしようも無い言われたとおりベルドフは車を降りた。
「手を挙げろ」
車を降りたベルドフに対し、運転手とは別の声が言った。柱の影に隠れていたのであろう。士官が二人おり、そのうちの一人が拳銃を向けて近寄ってきた。アントノフ大佐の懐刀、ゴルブノフ大尉で

ある。
　ベルドフはアタッシュケースを地面に置き、言われたとおり両手を挙げた。
「ゴルブノフ大尉、ご苦労」
　もう一人の士官が仰々しい声を上げる。ベルドフはそちらに目を向けた。ゴルブノフが脇にどいてトラックとの間に道を開け、その間を声の主がベルドフの方へゆっくりと歩み寄ってきた。
「アントノフ大佐」
　薄暗い地下駐車場のせいで接近するまでよく分からなかったが、相手が近寄ったことによってはっきりした。現れたのはイグナート・アントノフ大佐その人であった。若くして大佐にまで上り詰めただけあって、その顔は普段より自信が満ち満ちている。後ろで手を組みながら歩み寄り、アントノフはベケトフの前で立ち止まった。人を小馬鹿にしたような薄い笑いを浮かべて。
「ベルドフ大尉。うまいことやったつもりだったようだが、少々詰めが甘かったな」
「……」
　ベケトフは再度己の迂闊さを呪う。最後の最後でミスを犯してしまったようだ。呪詛の言葉は先ほどの数十ではすまないくらいであった。
「そういうことだ」
　対してアントノフは勝ち誇った笑みを浮かべている。
「アタッシュケースを寄越せ。君を釣るためにあえて本物の情報を置いておいたんだ。大方君はそれをロマネンコ大将にでも渡す気だったのだろう」
「すべてお見通しだということか」
「そういうことだ。大将閣下がそれを手にすることは無い」
　アントノフが手を差し出してくる。ベルドフはゆっくりと地面に置いたアタッシュケースに手を伸ばす。背後には銃を突きつけるゴルブノフがおり、車を挟んで運転手も拳銃を向けているためだ。左

手は挙げたまま、右手で取っ手を掴み持ち上げる。
「大佐」
アタッシュケースを肩の高さまで持ち上げてながらベルドフは言う。
「何だ？」
「あなたは自分がしていることがどういうことなのか分かっていないのですか」
「愚問だな。分かっているに決まっている」
「では何故です！　再びこの地を戦火で覆うことになるのですよ。いや、それだけじゃない。我が国も滅ぶことになるというのに！」
「その前に決着をつけるよ。文字通り国中の全戦力を動員すれば今度こそ勝利は我が軍の手に」
絶対たる自信を込めてアントノフは言う。
「しかしそううまくいくのですか？」
「む」
アントノフの顔から薄笑いが消えた。
「大佐は予備軍すべてを動員すればとお考えなのでしょうが、果たしてそれでうまくいきますか？　次は国連も黙ってはいませんよ。彼らが軍事行動に出れば、我が国は四方から潰されます」
「……」
「戦火に飲まれるのは我らが祖国です！　大佐、悪いことは言いません。このまま停戦を受け入れ、我が国を未曾有の大敗北から……」
「黙れ、大尉！　私のやろうとしていることに口出しするな！」
激昂し、アントノフが叫ぶ。その勢いに背後のゴルブノフがたじろぐ気配をベルドフは感じ取った。ベルドフはアントノフが怒る様を見て、逆に平静さを取り戻していった。
「……大尉、それを渡せ」
大きく息を吐いて見た目には落ち着きを取り戻し、アントノフは言った。
「これまでですな」

ベケトフが言った。
「そうだ。覚悟を決めろ」
アントノフが言う。
「いや、それはあなたの方だ」
何とアントノフが口にしたその瞬間、ベルドフが動いた。ベルドフはアタッシュケースから手を離した。地面に落ち、大きな音をたてたアタッシュケースに一瞬、アントノフらの意識が向いた。
その一瞬の隙をベルドフは見逃さなかった。
まず背後のゴルブノフにあらん限りのちからで肘打ちを見舞った。げぅ、とくぐもった声を残して背後に倒れるゴルブノフ。
それを確認することなく、ベルドフは素早く身を屈める。直後、銃声が駐車場に木霊した。運転手が発砲したのだ。だが、身を屈めて車の陰に隠れたベルドフに当てることは出来なかった。
ベルドフは脚に隠しておいた小型のリボルバー拳銃をとりだし、身を屈めたままアントノフに標的を定める。アタッシュケースに手を伸ばそうとしていたアントノフは、銃声に驚き手を引っ込めていた。ベルドフはアントノフを掴み上げ、眉間に拳銃を突きつけた。
「銃を捨てろ！　でないと大佐の命はないぞ！」
ベルドフらの側に回って銃を向けてきた運転手に対しベケトフは叫んだ。素早く移動したはいいがやはり位置的にはベルドフの方が早かった。銃を撃たれる前にアントノフを人質にとることが出来た。
「どうした、早くしないか！」
なかなか拳銃を捨てない運転手にベルドフは再度言った。
「軍曹、銃を捨てろ」
眉間に拳銃を突きつけられ、アントノフは生きた心地がしないのだろう。冷や汗を流している。それで渋々ながらようやく運転手は拳銃を手放した。ベルドフは地面に落ちたアタッシュケースをアントノフから奪い、拳銃眉間にを突きつけながら運転手に近寄っていく。
「ご苦労」

ベルドフは言いざま、運転手をアタッシュケースで殴打した。硬いチタン合金製のアタッシュケースの一撃を横っ面に喰らい、運転手は昏倒する。ゴルブノフは先ほどの一撃がうまく決まって昏倒している。うまくいった、とベルドフは安堵する。

「大尉、ただで済むと思うなよ。あの音を聞け」

ナイフを突きつけられたままのアントノフが言う。足音が聞こえてきた。それも複数だ。銃声を聞いて駆けつけてきた兵士達だろう。

「逃げられんぞ。大人しくしていた方が……」

「御免被る」

ベルドフはアントノフの眉間から拳銃を離した。そして、彼を思いっきり蹴り飛ばした。

「ぬおっ」

声をあげて地面に倒れこむアントノフ。それを見届け、ベルドフは車の運転席を確認する。キーは付いている。開けっ放しになっていた運転席にアタッシュケースを放り込み次いで自身も車に乗り込む。キーを回し、エンジンを始動させる。

「大尉、逃げられんぞ！」

アントノフが叫んでいるがかまわずアクセルを踏み、発進。ハンドルを切りアントノフの目の前ギリギリを音を立てながら旋回していく。目の前を車が通り過ぎていくのにアントノフは大いに肝を冷やしたであろう。叫ぶアントノフをバックミラーで見つつ、ベルドフは地下駐車場を出、市街地を驀進していった。

アントノフは憎々しげにベルドフの逃げて言った方向を睨んだ。

「大佐！」

アントノフに呼ばれ、到着した兵士らの指揮官がアントノフに言った。アントノフは振り返る。その形相に指揮官は一瞬怯んだ。

「ベルドフ大尉が我々の機密情報を奪って逃げた！」

「なんですと！」

「直ちに追え！　我が軍の車両だ！」
「は、はい！」
指揮官は敬礼してきびすを返し、部下達に向かって叫んだ。
「ベルドフ大尉を追え！　急げ！」
「少尉」
アントノフは指揮官を呼んだ。
「はっ」
「他の兵に気取られるな。計画はあくまで極秘に行わなくてはならない」
「分かりました。始末は街の外で」
「うむ」
追跡の為の車両が二台、動き出した。指揮官は二台のうちの先頭の方に乗り、ベルドフを追って発進した。
「逃がさんぞベルドフ」
追跡隊が去って言った方向を睨みながらアントノフはつぶやいた。

ベルドフは街道に出た。街道は木々の間に作られた二車線のもので、ところどころ舗装が剥がれている。砲弾が当たって、或いは戦車が通過するなどして剥がれたのだ。戦争の傷跡はここにも見られる。
ふとバックミラーを見、制帽がなくなっているのに気づいた。どうやらさっき暴れた時に落としたのだろう。
まあいるものでもないし、いいだろうとベルドフが思っていると、バックミラーにちらりと後方から迫る小型トラックが映った。ベルドフは振り返る。数は二台。どちらもＵＡＺ３１５１２だ。ベルドフは前を向き、アクセルを踏み込んだ。唸りとともにエンジンが回転数を上げる。
ふと、ベルドフは妙な感覚を覚えた。追ってくる兵士達は命令を受けて動いているとはいえ、本来ならば味方である。それがどうに

も妙な感覚を覚えさせたのだった。
トラックに装備されているＰＫＭ機関銃が射撃を始めた。銃弾がベルドフのトラックの車体に当たり、火花を散らす。
「考えている場合じゃないな！」
ハンドルを操作し蛇行させる。少しでも照準をつけさせないようにするためだ。だがもちろん、すべて回避するなど不可能である。車体に銃弾が当たる音が、車内に響く。いつ自分自身に当たるかとハラハラしながら必死にハンドルを操作する。
右手の木々の間の向うに薄っすらと街道が見えた。
ベルドフは思い切ってハンドルを右に切り、木々の間に突っ込んでいった。突然のことに追っ手の兵士らは唖然とした。車で木の中にに突っ込むなど考えもしなかったからだ。
ベルドフはスピードを落とさず、なおかつ木に衝突しないように気をつけながら森の中を突進していく。
木々の間を突っ切り、街道にでたベルドフは後ろを振り返る。追っ手の車両は見当たらない。
してやったりと笑みを浮かべ、ベルドフは街道をひた走るのであった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3425t/

アンダーエスコート

2011年5月19日09時46分発行